



 文化庁

平成28年度

# 文化プログラムシンポジウム 実施報告書

 文化庁



# 平成28年度 文化プログラムシンポジウム 実施報告書

## 目次

1. TRONプロジェクトシンポジウム -TRONSHOW-	03
2. 文化プログラムシンポジウム in 新潟	07
3. とちぎの元気を世界に！ 栃木県文化シンポジウム	11
4. 文化プログラムシンポジウム in 大阪	14
5. 参考：2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化プログラム担当課長会議	19

# TRONプロジェクト シンポジウム - TRONSHOW - 文化庁特別セッション 「インバウンド4000万人に向けた文化情報発信のあり方」

## 1 開催概要

TRONプロジェクトは、IoTやユビキタス・コンピューティング環境の実現に向けた総合プロジェクトの名称である。OPEN IoTを実現するための基礎技術、開発環境の最新の成果、更には防災、観光、交通、環境問題など都市が抱えるさまざまな問題解決のためにIoTをどう活用するのかという応用レベルでの取り組みをこのTRON SHOWで紹介。

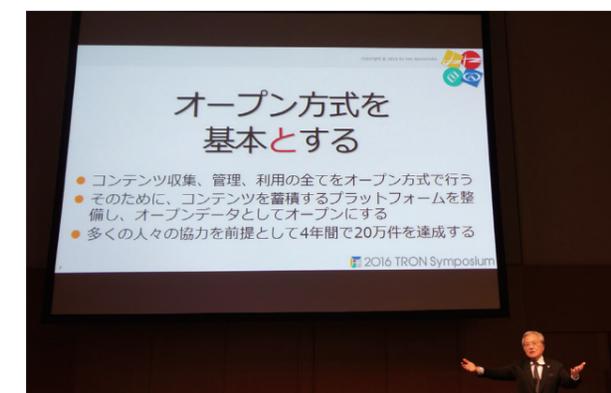
2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、インバウンド需要が高まるとともに、日本文化への関心が一層高まるが見込まれている。文化庁では、これを好機とした「文化芸術立国」の実現に向けて、日本全国で行われる様々な文化活動の情報を国内外に発信するためのポータルサイト「文化情報プラットフォーム」の構築を進めている。このサイトは、自治体や文化施設運営者らによる情報の登録やシステムの提供が可能であり、オープンデータとして公開するとともに、将来的には自動翻訳ソフトを使用した多言語対応も予定している。本セッションでは、TRONプロジェクトリーダー坂村健氏と、東京大学名誉教授・前文化庁長官の青柳正規氏、文部科学省顧問・前パリ日本文化会館館長の竹内佐和子氏が登壇し、この「文化情報プラットフォーム」を活用することで、文化芸術の発信・見える化をいかに効果的に促進できるのかを議論した。

**日時：**平成28年12月16日(金) 15:00～16:30  
**会場：**TRONSHOW内  
 東京ミッドタウン ホール シアター2  
**登壇者：**坂村 健 東京大学教授  
 青柳 正規 前文化庁長官  
 竹内 佐和子 文部科学省顧問  
**司会者：**坂村 健 東京大学教授  
**来場者数：**167名

※役職は当時

## 2 シンポジウム

坂村 健 東京大学教授



坂村健氏による講演

文化庁は、「文化情報プラットフォーム」というプラットフォームを作成し、情報発信を望む誰もが利用できるようにサポートしたいと考えている。

合わせて自動翻訳による多言語化を進め、2020年までの4年間で20万件の情報発信を目指す。「文化情報プラットフォーム」はオープンデータ方式で、誰でも利用・活用できるプラットフォーム。紙情報ではなく、コンピューターが読める形での発信が必要。人工知能を使った翻訳システムにとっても、4年間で20万件というかなりのデータを登録することで精度が高まる可能性があり、実現すれば文化情報のレガシーになる。

例えば、国立系の博物館・美術館からの専門的なデータ提供を受け、データベースに加えることで串刺し的に検索できるシステムを構築する。様々な人の協力による枠組みの中で、権限をどこまで委託可能とするのか、また情報のクオリティを維持するメカニズム等、考えるべき課題は多い。情報登録に関しては、モチベーションを上げるために、アメリカのXプライズのように賞金制度を設けるのも一案。アメリカでは、オープンコンテスト化して税金で賞金を出している。

## 青柳 正規 前文化庁長官



青柳正規氏による講演

オープンプラットフォームが大事。各地域に基幹大学を設定し、学生による地域イベントのレポートを投稿してもらうという仕組みもありかもしれない。石川県能登の珠洲市は、人口12,000人ほどの市で現在、元野村証券の方が市長をされている。浜揚げ式塩田で有名だが、この地域には51の祭りがある。観光協会と組んで情報を発信したところ大成

功して観光客の増加につながった。こうしたデジタルデータはあるはずなので、データベースにすぐ加えることができるだろう。各イベントは、「文化オリンピック」や「beyond2020」の認定により価値付けされるのが理想的。また、珠洲市では、交通量が少ない事を利用して、金沢大学と一緒に自動運転の実験も行っている。ここで採取されたデータは、全国の過疎村が抱える共通問題である自動運転の導入にも役立つだろう。話を戻すと、12,000人で51件(の文化情報)だから、日本全国でやれば4年で20万件もいけるはず。

人口減少・縮小はどこ自治体でも抱えている問題。東京でも将来的には23区中11区が赤字になると言われている。政府はGDPを600兆円増やすと言っているが、実現が大変困難な目標。個人GDPは現在、香港、シンガポールの方が大きい。この状況で鍵となるのは、「文化」というものにどれだけ接するか、豊かさをいかに享受するかにある。「文化」というものを規定しない方が良いと思う。それぞれの判断で、「文化オリンピック」や「beyond2020」に応募して欲しい。文化は、同感、理解、寛容があって広がっていく。それは、さらに世界の拡張、ひいては世界平和にもつながる。拡がりが増えれば理解も深まる。

## 竹内 佐和子 文部科学省顧問

5年間パリ日本文化会館で館長を務め、20年前の5年間余の滞在も含めると10年以上パリにいた。この間、世界の現場から日本を見てきた印象を申し上げると、日本の情報は、ほとんど無いに等しい。日本のイメージとして、文化にこだわりはあるが何を考えているのかわからない。これを文化情報プラットフォームを利用してどう引っくり返すか。これがポイントである。日本の外に出たら言葉が大事で、イメージだけでは伝わらない。いかに日本に関心のない人を惹きつけるか。海外の人が日本に興味を持っていると考えるのは幻想で、惹きつけるパワーが必要。文化情報発信は、何を伝えたいのが重要。例えば、祭りのストーリーを開示する等、今は埋もれている情報を発信する。外国の人が興味を持っているものは見えにくいもの、消えつつあるもので、これをどう見せるか、見えにくい部分の情報を発信していくことが大事。サイトに関して言えば、書き込みやすく、見つけやすい、フォーマットの埋め込み型が理想。ユーザー別の知的好奇心に応えられる仕組み、蓄積効果により多くの情報の中から面白いものが出てくるようにすべき。

また、情報のオーガナイズも考えなくてはならない。成功例としては、



2016 TRON Symposium  
竹内佐和子氏による講演

GoogleとWikipediaだろう。Googleの検索能力とWikipediaのストーリー性、この二つの良いところ取りを提案したい。日本の美術館ウェブサイトは、ヴァーチャルで見られる作品も無く、説明もない。情報としてはゼロに近い。

## パネルディスカッション



(左から)登壇者：竹内佐和子氏、青柳正規氏、坂村健氏

**青柳** 例えば愛知の花祭りのデータは名古屋大に蓄積されている。同じように蓄積されたデータが日本全国色々あるのではないか。例を示せば、編集者／主催者の枠組みが活用出来るはず。

**坂村** 大学の利用という考えは良いと思う。

**竹内** 今、世界のキーワードは多様性。地元の情報を大学の研究者が編纂することで、新しいもう一つの日本の歴史が作れるのではないか。

**坂村** 大学への協力要請はすぐにでも考えたい。

**青柳** 以前、東大120周年(1997年)のイベントとして、エアドームからの衛星放送授業を坂村教授と企画した。

**坂村** 24時間、BSとCSで授業を無料で配信したらと提案したが、大学から怒られた。

**竹内** TED Talksのように教育制度の外にあるものが面白い。学びが大学の外に広がっている。

**坂村** 短くても情報を発信することが大事。それを考えると最近話題になっていた「大学に文化系は必要ない」という議論はおかしい。

**竹内** 世界から見ると、日本は文化しか面白くない。

**坂村** 日本のマンガコミックは世界でも人気のようだが。

**竹内** 20年前パリでは全くメジャーでなかったが今は、とても盛り上がっている。

**坂村** マンガの先のコンテンツが欲しい。

**青柳** 現在夏目漱石没後100周年記念事業が賑やかだが、これから100年後の時代、文豪に代わるものがマンガ家なのではないか。「神の雫」というマンガがフランスのワイン離れに一役買ったと聞いた。1964年の東京オリンピック招致では、IOC会長に招致委員会が網町の三井倶楽部で1947年のシャトー・ディケムを提供し招致を決定付けた。

**青柳** 文化庁では、昨年より「日本遺産」の認定を始めた。地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを作り、親しんでもらうことを目的としている。

**坂村** そうしたストーリーを作りやすくするための「文化情報プラットフォーム」だと思う。GoogleにもWikipediaにもプラットフォームを利用して欲しい。ビッグデータのAIによる解析から、新しい物語が出てくるのではないか。

**竹内** 情報の連携、違った分野の情報の申ししが必要。今の県境や国境は行政的なもので、かつては「道」で繋がっていた。

**坂村** センサーによる状況、環境の情報データ取得は始まっている。プラントで利用され、故障を事前に予測するなど、本来関係ないと思っていたデータが活用されている。「文化情報プラットフォーム」でもこういう現象が起こるのではないか。

# 文化プログラムシンポジウム in 新潟

**青柳** 「文化情報プラットフォーム」によるサポートで、ストックとしての文化の蓄積ができれば良い。

**坂村** 集まったデータをどう利用していくかも考えるべき。

**竹内** 文化“センサー”的な役割を誰がやるかも大事なポイント。当事者は価値がないと思っていることでも、海外から見たら価値があることもあるので、第三者の目は必要。

**坂村** 古文書から事実がわかり、史実の確証につながることもある。データとして集積できれば「文化情報プラットフォーム」でも同じことが起こり得る。やはりセンサーを担当する人が重要。

**青柳** ロンドンオリンピック開催時の文化プログラムでは、グラスゴー大学の協力が大きかった。

**坂村** 大学にセンサーになってもらうのは良いアイデアかもしれない。

**竹内** 大学の取得単位にもしたい。

**坂村** 20万件の情報を集めるために、美術館を利用することも考えた。公立の美術館に加え、企業美術館にもデータ提供を呼びかけ、さらに大学でこぼれた部分を拾うのが良いかもしれない。

**竹内** 多言語化については、留学生にシステムに入ってもらえるかどうか。

**坂村** ロンドンオリンピックでは、英語でない言語での情報発信にロンドンの呼びかけによりオープンデータを利用していた。

**青柳** 自動翻訳システムは有効だと思う。

**坂村** 大学の駆使、学生・留学生の利用は是非考えていきたい。

**竹内** 地方に行くと、人の話が一番面白い。口承と呼ばれる、喋っている形での伝承も一つのジャンルにしてはどうか。聞き取りが大事になってくる。

**青柳** 「観天望気」には、各地域のノウハウが伝承されている。

**坂村** リタイア後の人にもセンサーになってもらうと良い。

**竹内** 高齢化という後ろ向きな言葉ではなく、長い間活動できるというようにポジティブに変換する。リタイア後の第3ステージを文化のステージにしてもらいたい。

**坂村** どのように協力してもらうか、体制を整える必要がある。文字ではなく、画像情報の集積も考えたい。画像は、集まれば集まるほど精度が上がる。

**青柳** 1964年の東京五輪記録映画は市川崑監督、札幌五輪は篠田正浩監督、そして2020年は市井の人々が撮影した記録、としてはどうか。

**坂村** 人間のセンサーも必要だが、コンピューターによる人工センサーも欲しい。

**青柳** 公募制が良いのでは。

**坂村** 全てオープン&フリーにする。TRONもそうだが、長く続けること、何よりも主張が大事。

**竹内** 2020年のオリンピックだけではなく、新しい主張、コミュニケーションツールとして「文化情報プラットフォーム」を推進するべき。日本の文化は、世界から見ても魅力的。メニューまではあるので、体制の整備が急務。文化に携わる人は、フランスでも型破りな方が多い。この機会に、新しい日本のイメージを構築してはどうか。

**青柳** 尾形光琳の「燕子花図」は、伊勢物語を知らない外国人が見た場合、デザインだと思う。琳派が世界でデザインとして評価されるのは、日本文化に特有の、説明せずに共有する寡黙な文化の象徴だと思う。しかしながら、感動の共有には、やはり言葉が必要。

**坂村** お二人から力強い言葉をいただいた。引き続き、文化情報の発信に取り組んでいく。



シンポジウムの様子

## 1 開催概要

4年後に開催を控えた2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、実はスポーツの祭典のみならず、文化の祭典でもあり、多くの文化プログラムの開催が全国で予定されている。このオリンピック・パラリンピックをきっかけに日本が世界から注目されるのを好機とし、日本の文化をより魅力的に世界に発信していく必要がある。

その目標に向けて、豊かで多様な日本の文化の蓄積を我々自身が再確認し、資源として活用し、さらには世界に向けて発信していくためには、日本の文化を深く理解することができる機会を全国各地に拡大する事が期待されている。

本シンポジウムは、湊町として独自の地域文化を持ち、昨年度の東アジア文化都市でもあり、更にはアーツカウンシル新潟を設立するなど、積極的な文化芸術振興に取り組んでいる新潟市にて開催し、文化プログラムの企画に欠かせない“ストーリーづくり”を行うために必要なコンセプトの普及を図ることで、各地域における文化資源の再確認、地域固有のストーリーを背景とした文化プログラムづくりを進めるとともに、地域ごとに文化プロデュースを担う人材を発掘することを目的とした。

**日 時**：平成28年12月18日(日) 16:00～18:00

**会 場**：りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館 能楽堂

**主 催**：文化庁

**共 催**：新潟市／公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

**協 力**：アーツカウンシル新潟

**登壇者**：小林 昌二 みなとびあ 新潟市歴史博物館館長／新潟大学名誉教授

篠田 昭 新潟市長

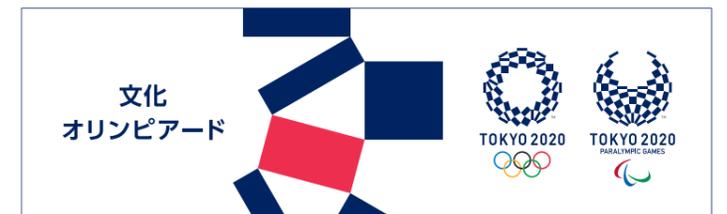
野内 隆裕 路地連新潟メンバー代表／日和山五合目館長

竹内 佐和子 文部科学省顧問

**モデレーター**：杉浦 幹男 アーツカウンシル新潟 プログラムディレクター

**来場者数**：約114名

※役職は当時



## 2 シンポジウム

### 主催者挨拶

磯谷 桂介 文化庁長官官房審議官

磯谷文化庁長官官房審議官が文化庁を代表して主催者挨拶を行い、また、文化プログラムの認証制度について説明を行った。



磯谷審議官による主催者挨拶

基調講演 竹内 佐和子 文部科学省顧問

「地域文化発信のためのストーリーづくり」

パリで5年間日本文化会館の館長として、海外で、日本文化を外に向けて発信する役割を担い、今は、文科省の顧問として、日本文化発信のための戦略づくりを担当している。地方からの発信は国の戦略の一つであり、新潟から何を伝えたいのかを明確にすべき。

海外から見ると日本の文化は特徴が見えにくく、情報量が少ないため、日本を行き先として選ぶ人々はまだ少ない。現在、訪日観光客は年間2,000万人だが、2020年までに4,000万人に増やすという目標を政府は掲げている。この倍増した2,000万人にどう情報を発信し、どうもてなすかが戦略のポイント。現在ある観光資源だけではダメ。新潟に関して言えば、次の2点を提案したい。

① 見えないストーリーの発信

各地域に伝承される言い伝えなど、新潟の背景を含めて立体的に説明する。

② Niigataというローマ字表記の地名が理解されるか

越後の物語からスタートすることを提案したい。「越」という文字には色々な越後のストーリーが残っている。

新潟の英訳は「new lagoon」で、昔は海だった場所。縄文時代に現在の越後平野ができ、海と山、両方の文化を持っている。越後国は、実は大化の改新の時代から既に始まり、西日本と東日本の二つ顔を持っている。越後という名前には、当時の都、京都から見た遠いところという意味もある。また、佐渡は12～13世紀にかけて罪人の流刑先でもあり、その佐渡に能の創始者、世阿弥がいた。能の革新家である世阿弥の島流しは重大事件だが、世阿弥が始めた能は佐渡中に広まり当時300をも超える能舞台があった。現在でも30は残っている。

他にも、天照大御神の御曾孫である天香山命を祖神とする彌彦神社はまた別のストーリーとして語るができる。このように、奈良時代から中世までのストーリーが豊富で、世界から見ると、すごく魅力的だと思う。

もう一つのストーリーとして、信濃川、阿賀野川の「水」との闘いが挙げられるだろう。信濃川は江戸時代、300回を超える洪水を起こしており、歴代の藩主は干拓や排水など、現在の米作りのための絶え間ない努力を続けてきた。この越後から新潟への転換のきっかけとして、港ができたことが大きい。東京都と同じ位、広大な越後平野をどうアピールするか、越後のストーリーを上手く使いながら世界に発信するのが良いだろう。

さらなる注目ポイントとしては、ものづくり文化として、燕三条の金属加工技術がある。日本の鋼を研ぐ技術は世界に類がなく、日本の包丁に世界は注目している。パリでも日本の包丁は人気が高い。江戸のものづくりストーリーは燕三条にあり、もう一つは上杉、直江、真田という侍のストーリーがある。土地の干拓事業は、こうした大名がいたから成功した。侍のストーリーは新潟平野と丘陵地帯に残っているので、こういった



竹内佐和子氏による基調講演

横のつながりから新潟の持つポテンシャルを発信する。特に佐渡の文化が大事。以前、パリのシャトレ座で坂東玉三郎による鼓童の公演があった。その時にも感じたが、日本の神は地中からやって来る。西洋では神は空から降ってくる存在。能は大地の力を取り入れており、今日の公演でもそうだったが、舞台から演者の足が離れない。たまに暴れる水の神、そして土の神、この水と土があって新潟の酒造り文化は成り立っている。これからの文化発信に必要なのは、持っているものを新しい産業にどう活かしていくか、どうデザインしていくかという事。新しい使い方の模索、つまりイノベーションが不可欠。文化は、社会の外にあって、既存の枠組みを壊す役割も担う。(京都から見た)文明の果てと東北文化のせめぎ合う場所、それが新潟だと思う。やはり、新潟という現代の行政のくくりで行くのか、越後、越の国で行くのか、呼称についての議論も必要。まずは新潟市が越後の玄関になるべき。そこから佐渡、長岡、燕三条と様々な場所に繋がっていくはずだ。

パネルディスカッション「新潟の地域文化の価値の再発見と世界への発信」



シンポジウムの様子

杉浦 テーマは「新潟の地域文化の価値の再発見と世界への発信」。その前に、少しだけアーツカウンシル新潟について、ご紹介をさせていただく。アーツカウンシル新潟は、先日9月26日、公益財団法人新潟芸術文化振興財団内に設立された。専門的な人材によって新潟市の文化芸術を支援するための組織で、市の文化芸術施策への提案や市民の皆さまの活動の支援を受け付けている。最近だと、12月16日(金)より古町7番町の旧大和デパートで開催されている「大和デパート 記憶と希望展」の広報や資金調達などの支援を行っている。

先ほど、竹内先生から「地域文化発信のためのストーリーづくり」と題した基調講演をいただいた。地域の文化を発信していくためには、単に名所や祭り、あるいは特産品といった観光資源を発信していくだけではなく、そこにある物語、ストーリーを付けることで付加価値が付き、外国人に魅力的な文化資源として発信することができるというお話を、様々な事例を含めてご紹介いただいた。新潟市のイメージといえば、「米」と「酒」というのが、外から来た者として思い浮かぶのですが、では新潟市にはどのような文化資源があって、どのようなストーリーを作ることができるのか。ここでそのような議論が進み、できれば具体的な取り組みがみえてくると良いと思っている。

では、まずご登壇の皆さまの簡単な自己紹介と竹内先生のお話を受けて、「ストーリーづくりのための新潟の文化資源」について考えられた事やアイデアなどを伺いしていきたい。まず、小林先生、いかがでしょうか。

小林 新潟市歴史博物館館長の小林です。淳足柵(ぬたり。古代の城柵)の研究をしており、竹内さんの言及された水との闘いについては、歴史博物館で常設展示している内容だ。

杉浦 ありがとうございます。では、野内さん、いかがでしょうか。

野内 私が代表を務める路地連新潟では、新潟の楽しさを発見して発信する活動をしている。歴史の上に残っている物を発掘する活動。まず町を体験して、そこから歴史を知る。そのコース(シナリオ)作りをしている感覚。最近では、他の地域で同じような活動をしている人と繋がり、交流することが増えた。こうした交流を通して、自分たちの地域の再発見があると気付いた。

杉浦 ありがとうございます。篠田市長、いかがでしょうか。

篠田 新潟市は、平成の大合併により政令指定都市になった。新しい新潟市とは?という課題を常に考えている。我々は、どこから来て、どこへ向かうのか。「食と花の政令都市」としてアピールしていたが、もうひと掘り欲しい。そこで考えたのが「水と土」から生まれたまち、新潟としての発信。2009年から始まった「水と土の芸術祭」は、現在市民運動レベルにまで拡大している。新潟市では、市町村の大合併が逆にアイデンティティーの掘り起こしに繋がった。木津村の棧俵(サンバイシ)神楽など地域の誇りを見せ合うようになった。水と土は、ストーリーでもある。水と土から生まれたものが酒であり米である。

杉浦 ありがとうございます。何を見てもらいたいのか、そこに気付くことが大事だ。新潟市に豊かな文化資源があるということがわかってきた。先ほど、このシンポジウムの前に開催された伝統芸能公演でも、市山流そして古町芸妓の皆さまの素晴らしい舞踏が披露された。皆さまのご発言と伝統芸能公演をご覧いただきまして、新潟市の文化資源の魅力と可能性をどのように感じにられましたか。

竹内 文化を発信する際に重要なのは、どういう風に見てもらいたいのか、という事。あと悔しい、と思う事。新潟には瀧の文化がある。農業の祭りを前面に出すのはどうか。水との闘いをクローズアップすると大変だった、で終わってしまう。路地の話は、世界的に好きな人も多く面白いと思う。文化庁が立ち上げる情報サイト「文化情報プラットフォーム」にぜひ登録をして欲しい。ヨーロッパにはpassageという、ぶらぶらする哲学があるので、それとも呼応するのではないかな。また、佐渡文化に関して言えば、世界的にも知名度の高いプロ集団。プロ化することの大切さもある。世界が欲しているのは、とんがった情報、悪口を言われるくらいの情報だと思ったほうが良い。京都から新潟まで繋がっている北陸道を表に発信するのは容易ではないが、世界での需要はある。あえて困難なルートを提案するののも一つの手法。

杉浦 ありがとうございます。新潟市の文化資源の魅力と可能性が見えてきたと思う。

先ほど、オリンピックはスポーツだけではなく、文化の祭典であるご紹介いただいた。2020年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けて、今後4年間、全国で文化事業、文化プログラムが開催される。世界中の人々が日本の文化に注目し、多くの人々が日本を訪れるでしょう。新潟市は上越新幹線があり、東京から簡単に訪れることができる。東京のホテル不足も心配されていることから、オリンピックを観戦に来た方が、新潟市に泊まって、新潟市の文化を楽しむこともできるでしょう。新潟市の文化を世界に発信する絶好の機会となる。

オリンピックに向けて、日本の各地域の文化を知りたい人は増えるはず。それに合わせて外から来てもらうためのストーリーが必要。今ご紹介いただいた「新潟市の魅力ある文化資源をどのように世界に発信していけば良い」でしょうか。それぞれの専門の立場から、ご提案をいただきたい。また、それを実現するために、必要なことは何かについてもお話をいただきたい。



(左から)モデレーター：杉浦幹男氏、登壇者：竹内佐和子氏、篠田昭氏、野内隆裕氏、小林昌二氏

小林先生、いかがでしょうか。「みなとびあ」としての取り組みもご提案いただきたい。

**小林** 神々の問題は、ストーリーになるのではないかと。新潟には、隠れた神々の世界がある。佐渡と新潟が響き合うような陣構えで迎えたら良いと思う。博物館としては、多言語での説明を既に始めている。現在は、信濃川左岸の連携により、新潟に滞在して地元産の食材を調理できるような取り組みを検討中。楽しい地域づくりを目指している。

**杉浦** ありがとうございます。野内さん、いかがでしょうか。

**野内** 路地歩きのおかげは、動物写真家の岩合光昭さんだった。新潟の路地にいる猫を撮りたいとのことと案内している時に、花々を飾っている街並みがアンダルシアのようだとされた。路地園芸は、人の顔は見えないが気配は感じられる。個人的には、地元の良いところに気付いてなかった事に対する悔しさが原動力だった。活動としては、2010年には「全国路地サミット in 新潟」を開催、2014年には日和山の再生と進化の物語がグッドデザイン賞を受賞した。自分たちの街を楽しむことが発信にも繋がっている。NHKの番組「プラタモリ」の放映から漏れた情報として、新潟には砂防の歴史がある。砂防は、砂漠に森を作る様な作業。江戸、大阪、長崎に並ぶ港町の歴史、また瀧(ラグーン)という側面では、オランダやヴェニスのような街であることも語るべきストーリーだと思う。

**杉浦** ありがとうございます。篠田市長、いかがでしょうか。新潟市としての意気込みもお伺いできればいいのですが。

**篠田** 農民にとって、(水との)大変な闘いを癒すのは祭りだった。文化の創造力はある。神楽や4日4晩続く盆踊りは現在まで伝承されており、踊りの伴奏法である樽碁(たるきぬた)も再現されている。また、前半部で披露された市山流という踊りの文化もある。こうした文化に酒・食が加わればストーリーになるのではないかと。新潟には文化遺産は少ないが、文化を創造できる人材がいるのが強み。

**杉浦** ありがとうございます。実は神楽をまとめたDVDがある。外から来た人間として、新潟には面白いものがたくさんあるのに外に発信していないように感じる。遠慮しているのではないかと。新潟市は日本海側の文化拠点都市を目指している。今までのお話を受けて、新潟市の文化の魅力と可能性を実現するための秘策などを竹内先生にお話いただきたい。

**竹内** 新潟の方は遠慮深い。もっと暴れてもらいたい。京都の王朝文化の逆を行ってはどうか。ここでスイッチを入れ替えれば良い。東京から2時間という微妙な距離を利用したら良いと思う。消費文化主導ではない新しい生き方をしたいと思っている人は大勢いる。佐渡のプロ集団という、人がいるという緊張関係もある、コンテンツもあるのだから、どこかでアクセルを踏んで欲しい。隠れた努力もいろいろ、それが多すぎると思う。次のステップに向けて準備する必要がある。

新潟のストーリーとしては、やはり一番は水との闘いだろう。「プラタモリ」ばかり、色々な話を何うと、隠れた闘いが面白い。今日のシンポジウムが今後の番組作り、人作り、ストーリー作りのキックオフになると良い。新潟に行ったことがないなんて国際人として遅れている、と言われるように頑張って欲しい。

**杉浦** すでに新潟ではオリンピックに向けて、小池都知事ならウェルカムフラワーが百合になるのではないかと予想して新潟産の百合を使用してもらおうという話もある。2020年はもうすぐそこまで迫っている。

**篠田** 新潟では、「アートミックスジャパン」という日本の伝統文化を集約的にたくさん見られるイベントを開催している。今年は海外にも呼ばれ、今後も規模を拡大して展開予定だ。

**杉浦** 2020年オリンピック・パラリンピック東京大会はもうすぐだ。この機会に、新潟市から文化を世界に発信していく。そのために多くの市民、文化関係者の皆さまにご参加いただき、地域のストーリー作りに取り組んでいきたいと思えます。



来場者の様子

# とちぎの元気を世界に! 栃木県文化シンポジウム ～文化で参加するオリンピック・パラリンピック～

## 1 開催概要

とちぎならではの文化資源を発掘・育成し、文化を契機とした地域づくりに結びつけ、とちぎの元気力を国内外に発信する大きな契機としていくため、「とちぎ版文化プログラム」への参加を呼びかけるとともに、文化プログラムをフックとしたとちぎ各地での文化による地域づくりの方向性を多様な事例とともに議論。県内の文化・地域づくりの関係者をはじめとする参加者に、「文化プログラムに参加し、オールとちぎで、文化による地域づくり・元気力発信をしていこう」という機運を醸成する。

**日時**：平成28年12月21日(水) 13:30～16:30

**会場**：栃木県総合文化センター サブホール

**共催**：栃木県／文化庁／地域文化活用促進協議会

**登壇者**：福田 富一 栃木県知事

杉浦 幹男 アーツカウンシル新潟プログラムディレクター  
2020年オリンピック・パラリンピック文化プログラム  
静岡県推進委員会プログラム・コーディネーター

山出 淳也 NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事

村瀬 剛太 文化庁 長官官房政策課文化プログラム推進室 室長

五十嵐 順一 NPO法人 那須フィルム・コミッション 理事長

梶原 紀子 認定NPO法人 もうひとつの美術館 代表理事 兼 館長

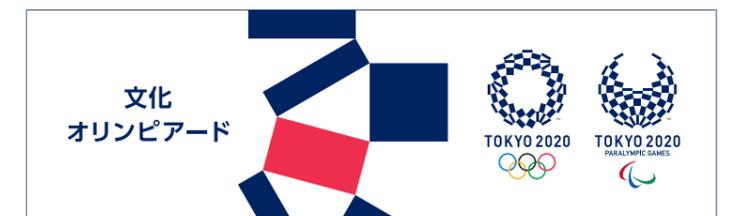
吉田 利雄 文星芸術大学 准教授

**出演**：子宝三番叟(烏山の山あげ行事)

鹿沼屋台囃子(鹿沼秋まつり)

**来場者数**：約200名

※役職は当時



## 2 シンポジウム

### オープニングアクト

#### 子宝三番叟（烏山の山あげ行事） 鹿沼屋台囃子（鹿沼秋まつり）

シンポジウムに先立つオープニングアクトとして、12月にユネスコ無形文化遺産として登録されたばかりの烏山山あげ保存会芸能部会による子宝三番叟並びに、鹿沼秋まつりから鹿沼市指定無形民俗文化財小松流玉田囃子組保存会玉田囃子が披露された。



烏山山あげ保存会芸能部会による子宝三番叟



鹿沼秋まつりから鹿沼屋台囃子

「子宝三番叟」は、江戸時代から伝わる常磐津節の演目で、「烏山の山あげ行事」では長く継承され、上演されてきたご祝儀の曲。また、鹿沼屋台囃子は、建徳元年（1370）年に鹿嶋神社が創建されて以来、奉納囃子として演奏され、その後改良され、小松流五段囃子として受け継がれているもの。現在は、地元の鹿嶋神社・八坂神社の奉納囃子や今宮神社の付け祭りに華を添えている。熱演に会場から惜しめない拍手が送られた。

### 開会挨拶

#### 福田富一 栃木県知事

とちぎ版文化プログラムを策定し、とちぎの魅力ある文化を国内外に発信するとともに、障害者や外国人をはじめ、あらゆる人々の参加・交流を促しつつ、文化振興と地域活性化に向け、オールとちぎで取り組んでいくことが語られた。



福田富一 栃木県知事による開会挨拶

### 基調講演①

#### 杉浦幹男 アーツカウンシル新潟プログラムディレクター 2020年オリンピック・パラリンピック文化プログラム 静岡県推進委員会プログラム・コーディネーター

#### 「文化プログラムは地方に何をもたらすのか」

杉浦氏は、自身の経験から、沖縄県における沖縄文化活性化・創造発信支援事業（沖縄版アーツカウンシル事業）の取り組みを紹介するとともに、新潟市と静岡県の事例を取り上げ、地域で文化を創造・発信してきた実績と同時に、その難しさや、さらに地域でのレガシーとは何であるのかを語った。



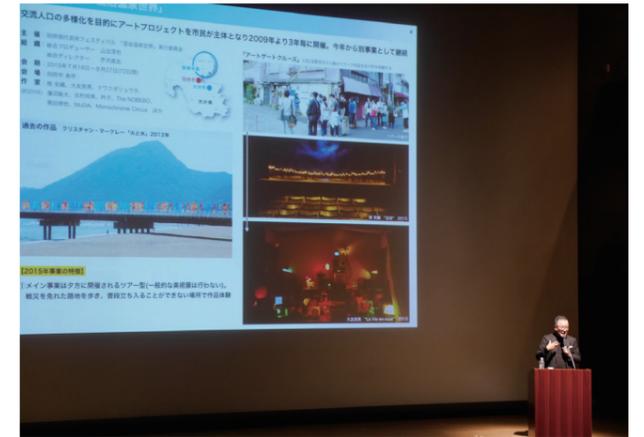
杉浦幹男氏による基調講演

### 基調講演②

#### 山出淳也 NPO法人 BEPPU PROJECT 代表理事

#### 「文化による持続可能な地域づくり」

山出氏は、「文化による持続可能な地域づくり」として、自身が立ち上げ、代表理事を務めるNPO法人「BEPPU PROJECT」の活動を紹介。同NPOは、地域の創造的なエンジンとしてアートを活かした問題解決や価値創出を行っている。なかでも国際芸術祭「混浴温泉世界」（2009年～2015年）の取り組みを例に、地域への波及（地域ブランド調査での順位アップ、観光客の滞在日数増など）を説明した。温泉が大きな地域資源であるなど、栃木県との類似点も多く、参加者は熱心に聴き入っていた。



山出淳也氏による基調講演

### パネルディスカッション「とちぎの元気を発信する文化プログラム」



（左から）登壇者：村瀬剛太氏、五十嵐順一氏、梶原紀子氏、吉田利雄氏

第2部のパネルディスカッション「とちぎの元気を発信する文化プログラム」では、コーディネーター進行を山出淳也氏が務め、文化庁文化プログラム推進室室長村瀬剛太氏、NPO法人那須フィルム・コミッション理事長五十嵐順一氏、認定NPO法人もうひとつの美術館館長梶原紀子氏、文星芸術大学准教授吉田利雄氏がパネリストとして登場。村瀬氏から文化プログラムについての詳しい説明がされた後、那須町でフィルムコミッションとユニークな映画祭を運営している五十嵐氏、那珂川町で廃校になった小学校を活用して障害者の芸術作品を中心に展示する

「もうひとつの美術館」を設立した梶原氏、地域連携に力を入れている宇都宮市の文星芸術大学の吉田氏が、それぞれの地域で展開している活動をプレゼンテーションした。

その後の議論では、文化が地域にもたらすものについてや、いかに文化による地域づくりを進めていくかの課題が提示された。行政の予算の制約に照らし、長期的な支援を望む声、主体的に取り組んでいる団体同士が連携する必要性などがあげられた。

# 文化プログラムシンポジウム in 大阪

## 1 開催概要

オリンピック・パラリンピック競技大会は、スポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあり、2020年東京大会に向けて全国各地で数多くの文化プログラムが展開されていく。日本が世界中から注目されるまたとない機会を活かし、日本各地の多様な文化をより魅力的に世界に発信するとともに、文化資源を活用した産業化に取り組み、2020年以降に向けた新たな文化振興モデルを構築していく必要がある。

本シンポジウムは、地域の文化資源を再発見し、その魅力を国内外に発信する多様な文化プログラム実施に向けた機運の醸成と、2020年以降のレガシーとしての新たな文化振興モデル構築に向けた端緒となることを目的としている。

関西圏における経済の中心地であり、歴史的にも商都として文化振興に大きな役割を果たしてきた大阪において開催する本シンポジウムが、2020年に向けて、特色ある地域文化の魅力の世界に発信する機会となるとともに、官民連携による文化振興の先進モデルを構築・普及していく第一歩となることを期待して実施された。

**日時：**平成29年3月2日(木) 14:00～17:00

**会場：**国立文楽劇場

**主催：**文化庁

**共催：**公益財団法人関西・大阪21世紀協会

**後援：**公益社団法人企業メセナ協議会  
公益社団法人関西経済連合会  
大阪商工会議所  
一般社団法人関西経済同友会  
関西広域連合  
関西元気文化圏推進協議会

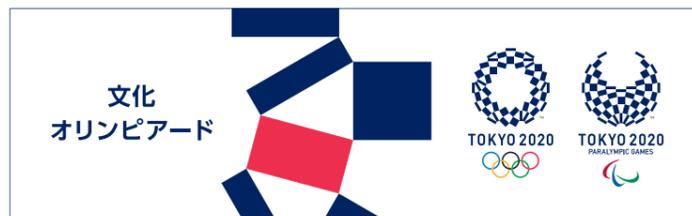
**登壇者：**宮田 亮平 文化庁長官  
鳥井 信吾 サントリーホールディングス代表取締役副会長  
榊田 隆一郎 榊田酒造店代表取締役  
塩見 有子 特定非営利活動法人アーツイニシアティヴウキョウ(AIT/エイト) 理事長

**モデレーター：**佐々木 洋三 公益財団法人関西・大阪21世紀協会専務理事

**出演：**桐竹 勘十郎・吉田 勘彌 ほか  
BORO ほか

**来場者数：**約350名

※役職は当時



## 2 シンポジウム

### オープニングアクト

桐竹勘十郎・吉田勘彌ほか 人形浄瑠璃文楽「二人三番叟」



人形浄瑠璃文楽「二人三番叟」(提供: 関西・大阪21世紀協会)

### 主催者挨拶と基調講演

宮田 亮平 文化庁長官

宮田文化庁長官が、東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化プログラムの認証制度や文化庁の取り組み(「スポーツ文化ワールドフォーラム」、「フライデーナイトミュージアム@上野」、「Arts in Bunkacho」)等に関して講演を行った。



宮田長官による基調講演  
(提供: 関西・大阪21世紀協会)

### パネルディスカッション

「2020年以降の新たな文化振興モデル構築に向けて～文化資源の産業化と世界発信～」

**佐々木** 日本を取り巻く環境はますます不安定。背景には、これまでリベラル・デモクラシーを支えてきた中間層が衰退し、一部の富裕層と多数の貧困層という「超格差社会」がある。この試練を乗り越えていく力は「文化」。欧米のような一神教ではなく、多様性を享受する日本の精神や文化、寛容の心が世界の安定と平和に貢献。時あたかも、文化庁の関西移転に向けての実証実験も本格化、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムを全国各地で展開しようという動きも。大阪の文化資源をどう活かし、文化プログラムとして展開し、世界に発信していくかを4つのセッションに分けて話を展開したい。①パネリストの皆さんのご紹介を含め、日頃、皆さんが取り組まれている文化活動や取り組みの紹介、②「大阪のレガシーを探る」、③その文化資源を活用して地域を元気にしていく官民連携・協働、④大阪を元気にする「大阪版文化プログラム」の推進と世界発信のための具体的な提案を伺いたい。最初に、特定非営利活動法人アーツイニシアティヴウキョウ理事長、塩見有子様、よろしくお願いたします。

**塩見** エイトの活動は、現代アートの面白さと複雑さを多くの人に伝えて、アートについて議論できる場を作ろうという思いから16年前の2001年に設立した。設立メンバーは、6人のキュレーターとコーディネーター、現代アートのコレクター兼弁護士など。メンバーの数名は、イギリスで現代アートを勉強しロンドンのアートシーンに触れてきたが、東京には足りないものがたくさんあるという気持ちが発端だった。そこで、当時の日本の芸術系大学にはキュレーションを学ぶところがなく、海外に行くしかなかったため、現代アートの学校「MAD: Making Art Different」を立ち上げ、キュレーション講座を作り人材育成を行った。今では、受講生の多様化が進み、自分が勤める企業内でのアートの取り組みにも繋がっている。もう一つの活動である、「アーティスト・イン・レジデンス」については後ほど詳しく紹介する。

**佐々木** ありがとうございます。次に、本日富山からお越しいただきました、榊田酒造代表取締役、榊田様よろしくお願いたします。

**榊田** まずは、東岩瀬町のアーティストを集めた再生例を紹介したい。

東岩瀬町には、北前船の廻船問屋の空き家がたくさんあったので、それを一軒一軒買い取り、作家に使ってもらうという取り組みをしている。多くの職人たちが住まいにギャラリーを併設して、アート作品を展示している。日本人はワインとか、他人の文化のプレゼンは上手いが、自国のプレゼンは下手だと思う。そこで、北前船の土蔵を改装して、日本酒を素敵に見せる店を作りたいと思って、東岩瀬町の空き家を改装してお店をオープンしている。今日も富山から3時間、電車に乗ってきたが、車窓から撮りたいと思える光景が一つもなかった。せめて自分の町は変えたい、という思いから始めた取り組みだ。



モデレーター：佐々木洋三氏 (提供: 関西・大阪21世紀協会)

**佐々木** ありがとうございます。続きまして、サントリーホールディングス代表取締役副会長、鳥井信吾様、よろしくお願致します。

**鳥井** まずは、サントリー創業者の鳥井信治郎の話をしたい。弊社は創立当初は、鳥井商店という名、次に寿屋という屋号でスペインワインと炭酸ソーダを扱っていた。信治郎のフィロソフィは、「利益三分主義」と言って、三分の一をお客様、三分の一を会社、そして残りの三分の一を社会に還元させることである。このフィロソフィに則り、私どもサントリーでは、5つの財団を運営している。財団での取り組み事例としては、クラシック音楽専門のホールであるサントリーホールの運営。また、サントリー美術館では、企画展を中心に展示を行っている。後は、サントリー学芸賞という若手研究者を対象とした賞も財団で運営している。



登壇者：鳥井信吾氏（提供：関西・大阪21世紀協会）

信治郎の残した言葉に、①やってみなはれ。②陰徳を積む。天地報恩。③親孝行は人のためになる。の3つがある。メセナという感覚とは違う。終戦直後の大阪駅での炊き出しについても、思ったらずぐやる。見て見ぬふりをしない、というのが彼の信念だった。事業は天地自然の報恩である。こうした創業者のフィロソフィを基に、私ども財団は会社とは違った別の世界とは全く思っていない。会社経営と財団運営はイコールだ。

**佐々木** ありがとうございます。それでは大阪における文化のレガシーを探るため、地域の文化資源という観点からディスカッションしていきたいと思えます。まずは、榎田さんから、いかがでしょうか。

**榎田** 御堂筋の両側に連なるお店は、ヴィトンやマクラーレンなど全てヨーロッパのブランドばかりで、これでは、どこの国に来たのかわからない。「日本にはラグジュアリーという言葉がない」と、ヨーロッパのワイナリーの友人から言われた。だから、日本酒を（世界に）売るのも難しい。伝え方が悪過ぎる。例えば、日本酒の漢字のラベルは、外国人の人には読めないし、読めないものには興味を持たない。つまり、評価をされない。アジアやアメリカには日本や日本酒のマニアが多いので、漢字ラベルでも売れるが、やはりヨーロッパで評価されないとダメ。わからないものは売れないし、伝わらない。「こうじゃない」という考えは捨て去った方がいい。

**佐々木** ありがとうございます。日本酒の話から、それではワインの取り組みについて、鳥井さん、いかがでしょうか。

**鳥井** 大阪は商いの町であり、産業界のチャンピオンも多い。かつての産業界のチャンピオンは、すなわち文化人でもあった。実業と文化をつなぐ事例として、フランスのワイナリーの例を挙げたい。ポルドーのシャトーは、オーナーの住むお城と醸造所とワイン畑の3つがセットになっている。サントリー所有のシャトー・ラグランジュも同様だ。ポルドーには、コマンドリー・ポルドー・ボンタン騎士団という寄り合いが存在する。要はワイン製造業者組合なのだが、スポーツ選手や有名俳優を呼んで叙任式をするなど、活動が華やかだ。農作物のぶどうは腐るがワインは長期保存が可能。また、格付けの文化があり、ワイナリーの格付けが、評価の一般化にも繋がっており、騎士団の存在も、フェスティバルを格式あるものになっている。ワインとフランス料理のマリアージュということで、

ワインは料理と楽しむ、ワインジャーナリズムもまた大変発達している。つまり、文化全体がフランスワインビジネスの装置になっている。産業は文化と結びつけて初めて成り立つ。

**榎田** ワイナリーとの違いでいえば、酒蔵には文化がない。建物はタン屋根で、米とのつながりもない。我々も、ボンタン騎士団を参考に、若手造り酒屋で「酒サムライ」という組合を「日本酒産産を我々が基幹産業にする」という意識を持って結成した。酒文化を再認識して良くすることが目標だ。

**佐々木** ありがとうございます。一方で、アートという側面から、塩見さんいかがでしょうか。

**塩見** 企業とアートをつなぐ「ART IN THE OFFICE」(マネックス証券主催)という取り組みのお手伝いを2008年から続けている。マネックス証券のプレスルームに設置する作品を公募形式で募り、約一年間展示する。審査員は、私とマネックス証券代表の松本さんの他、ゲスト審査員として毎年、ビジネス界とアート界で活躍している方に依頼しており、アーティストはプレスルームで二週間の間、滞在制作を行うこともできる。社員とのワークショップやこうした滞在制作を行うことで、社員とアーティストが知り合うきっかけになる。最初は社員もなかなか寄り付かなかったが、継続することで興味を持つようになった。また、ときに作品の購入にも繋がっている。

**佐々木** 企業の中での取り組みについて、ご紹介いただいた。それでは、次に官民連携および協働についてお聞きしたいと思います。榎田さんの取り組みは、民間資本ですか？



登壇者：榎田隆一郎氏（提供：関西・大阪21世紀協会）

**榎田** 北陸新幹線開通に伴う時限立法で、5年間、富山市から補助が出ていた。頑張る人には補助する。この補助金のおかげで移住してくれる若い作家たちもいるので、とても助かっている。私はあまり補助金ももらわず、古い家を改装して売ったり、あるいは賃貸で貸したりしている。家賃を払えない作家もいるが、世界に通用するものを作る努力をするよう後押しし、グラスなどの作品を買い上げ、お中元やお歳暮で配ることによって彼らを支援している。(古い家屋の改装という取り組みで関わ



登壇者：塩見有子氏（提供：関西・大阪21世紀協会）

ることがあり)文化庁は文化財を修復している方かと思っていた。新しいアーティストを支援する活動があまりないように思える。

**佐々木** 官のやらないところ、という意味で塩見さんいかがでしょうか。

**塩見** エイトの立ち上げ時、ちょうど文化庁によるアーティスト・イン・レジデンスに対する補助金事業の空白期だった。アパートは安く借りることができても、招聘する資金がない。そこで、海外からの支援に頼ることにした。AITの活動を初めて2年後、スウェーデンの財団(IASPIS)に直談判に行き提携を取り付けた。その後、オランダのモンドリアン財団とも提携し、2011年からは継続して文化庁の補助を受けて活動を広げることができた。

**佐々木** 夢と情熱でやってこられたわけですね。

**塩見** 信念と情熱を伝えるところから活動が始まっている。

**佐々木** 外国から来たカメラマンに話を聞くと、もっとアーティスト・イン・レジデンスをやりたいと言われます。日本の良さを知って、母国に伝えてくれるはずだと。鳥井さん、アーツサポート関西の、民間としての取り組みについて紹介してもらえますでしょうか。

**鳥井** アーツサポート関西は、もともと関西経済同友会の提言により社会貢献を目的として設立された。かつての企業人、実業人は、企業人イコール文化人だった。今の企業人は文化と離れた。アーツサポート関西の活動は、今一度、企業人=文化、市民=文化を取り戻そうとしている。若手バイオリニストの海外レッスン派遣、ワンコイン文楽、演劇など多岐に亘る。市民、企業と文化とのつながりを目指してアーティスト助成のための寄付を募っており、3年間で9600万円が集まり、文化・芸術家支援に繋がっている。

**佐々木** 民間の役割についてお話いただきました。官の立場からはいかがでしょう。

**長官** 文化芸術は特別なものではない、ということをまず知っていただきたい。文化は、全ての人が共有できるもの。漆の作家だけでなく、木から漆を採る人までが潤う社会にしたい。榎田さんの町は、みんな活き活きとしていた。塩見さんの世界へ発信する力、鳥井さんの利益三分主義はともに素晴らしい。我々文化庁も10カ月前とは変化している。皆様には、変わっていく文化庁の姿を心地よく見ていただきたい。

**佐々木** では、最後に2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて大阪での文化プログラムの推進と世界発信のための具体的なアイデアをそれぞれ伺いたいと思います。

**塩見** 東京を活動の拠点にしている私たちにとって、大阪はビジネスのまち、商都のイメージがある。エイトの活動を通じて感じるのは、立ち上がりはビジネスがアートを支えていたプログラムが、続けていくと、アートがビジネスに新しい価値を与え、そうした意味でビジネスを支える、こともある。これは大阪でも起こりうると思う。また、「Arts in Bunkacho」については、文化を生み出すのは人、作品を作ったアーティストにもフォーカスし、文化庁も招き入れるとよいのでは、と思う。

**榎田** 富山県人は真面目というより、つまらない。そういう土壌ではアートは育たない。それに比べて大阪は混沌としており人間力も高い。しかし、外の人間から見ると、自己満足に陥っていて、活かしきれていないように思えてもつたいない。あと、大阪は食い倒れのまちとして有名だが、大阪にまで食べに行きたいと思えるお店がそれほど多くない。アピールしきれていないように思う。タパスで町おこしをしたスペインのサンセバスチャンに行ったことがあり、楽しかった。しかし振り返ってみると、日本にもサンセバスチャンのような楽しい場所は、新橋や大阪などたくさんあると思った。大阪には素地があるのにもつたいないと感じているので、もっと上手にアピールしてがんばってほしい。



登壇者：宮田亮平文化庁長官（提供：関西・大阪21世紀協会）

**塩見** 大阪は、異質なものを受け入れるまちだと思う。

**鳥井** 経済人・企業人は文化にあまり興味を持っていない。どうも文化に興味があると、仕事をしていないように思われるようだ。大きな仕事をして実力があると、はじめて「文化に興味がある」と言える。本当はみんな、興味を持っているはずだ。榎田さんの取り組みを見せるとか、塩見さんのように芸術家と企業人のマッチングは大切だ。これから文化は企業人にとって不可欠なものになるだろう。

**塩見** 「ART IN THE OFFICE」を、ぜひ大阪でも取り組んで欲しい。  
**佐々木** それでは鳥井さん、大阪城での取り組みについて少し紹介していただけますでしょうか。

**鳥井** イギリスでは、毎年エジンバラ・フェスティバルという12の(演劇や舞台芸術を中心とした)フェスを同時開催する大きなイベントが開催されている。それが市民の誇りになっていて、経済効果も数百億ほどあり、経済と文化が密接に関わっている。そのイベントの全ての中心が、エジンバラ城であり、メイン会場ともなっている。夜間はライトアップが綺麗だった。大阪城の周りは、上から見ると緑が豊かでお堀の水が美しい。大阪人は、大阪城の魅力を自覚し、もっと活用すべきである。お祭りやフェスがあると企業活動も伝わりやすいのではないかな。これは、大阪に対する提案だ。

**佐々木** これまで、関西・大阪21世紀協会では大阪城というレガシーを活かして、大阪を舞台芸術の発信拠点にしようという社会実験を行ってきました。VTRをご紹介します。是非、文化プログラムを大阪城でできたらいいなと思います。(大阪城エリアでのイベントVTRを上映)

**長官** (VTRを受けて) 観光は経済につながる。お金が動く。文化は身近にある。伝えることが大事。伝える、という漢字は「人が云う」と書く。言わないと伝わらない。私のモットーは、「鼻歌まじりの命がけ」。肩の力を抜いて、命がけでやる。大阪の文化資源の魅力をみなに伝えて欲しい。人に言うことで文化は伝えられる。

## クロージングパフォーマンス

BORO「大阪で生まれた女」

BOROほか「Color Color」



会場が一体となったクロージングパフォーマンス (提供：関西・大阪21世紀協会)



BORO氏によるクロージングパフォーマンス (提供：関西・大阪21世紀協会)

# 参考：2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化プログラム担当課長会議

## 1 開催概要

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向け、文化プログラムの実施を通じて、魅力ある日本文化を世界に発信するとともに、地域の文化芸術による地方創生、地域活性化を図ることが求められている。開催地である東京のみならず、日本全国各地でより多くの方が参加できるプログラムを実施することが、オリンピック・パラリンピックを盛り上げることに重要である。本会議では、文化プログラムのガイドラインやロゴマークが整備されつつあることから地方自治体の文化プログラム担当課長向けに、「東京2020文化オリンピアド」を所管する公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、「beyond2020プログラム」を所管する内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局、そして文化庁の担当官から文化プログラムの制度や各機関の取り組みについて説明・周知を実施した。

**日時**：平成29年1月12日(木) 13:00～14:30

**会場**：文部科学省講堂(東館3階 第1講堂)

**主催者挨拶**：杉浦 久弘 文化庁長官官房政策課長

**説明者**：堀 和憲 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会企画財務局アクション&レガシー課長

牧村 匡基 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局企画調整担当

村瀬 剛太 文化庁長官官房政策課文化プログラム推進室長

**来場者数**：47都道府県と20の政令都市の文化プログラム担当者 約180名

※役職は当時